

『榊都美夫手稿』とその周辺

昭和10年代 東京商大予科の学生たち

大月康弘

経済学研究科教授、附属図書館長、学園史資料室長(昭60経)

はじめに

学園史資料室に『榊都美夫手稿』（以下『手稿』）が収められたのは、2018年1月のことだった。それを手にしたとき、私はこの貴重な『手稿』が語りかける青春の息吹とも言うべきものに深い感慨をおぼえた。そしてそれは、一橋学園の歴史に儂くも咲いた一輪の花のような存在に思われてならなかった。そこで、この『手稿』の概容をここで速報し、併せて『手稿』を遺した「榊都美夫」と彼を取り巻く人びととの関係について若干の紹介を試みて、今後この『手稿』を考察するうえでの備えにしたいと思う

1. 榊都美夫（小林繁太）の生涯

榊都美夫（さかき とみお）。本名・小林繁太（こばやし しげた）氏は、豊かな才能を示しながら夭逝した詩人だった。

1919年11月4日に大阪に生まれた彼は、住吉中学を4年で修了、1937年4月に東京商科大学予科に入学した。この予科在学中に労咳を患い、小平の学園に結局6年間とどまることになる。『手稿』は、主にこのときに作られた詩と小説の束を中核としていた。

1943年9月に商大本科（国立）に進学すると、榊（小林繁太）は、西洋中世研究の上原専祿教授のゼミナールに所属した。詩作、小説の執筆をなお続けながらも、西洋中世史研究を生涯の目標に定め、研学につとめた。最初、14世紀のフランス詩人に関する研究を行ったが、恩師・上原との学問的交流のなかで中世封建制の社会構造分析に転じ、卒業論文「Feudal Monarch in Magna Carta -Some Problems about Military Service.」を上原に提出した。しかし、これが提出されたのは、1947年8月になってのことだった。

大学卒業は、1946年9月25日付けであった。後年出版された『榊都美夫詩集』（以下『詩集』）に付された「年譜」によれば、大学卒業頃のこととして「本泉村よりときどき出京。上原教授宅に泊まることもあったという。九月に継母死去。一時大阪へ帰る。同月二十五日附で大学卒業」とある。本泉村とは、榊（小林）と結婚した木村うた子の実家があった埼玉県北部の村である（現在は、埼玉県本庄市の南部に編入されている）。



1947年2月、榊（小林）は、妻うた子とともに大阪へ移転。ここで3カ月ほど占領軍検閲局につとめたが、基本的には中世の西欧における封建制の研究をつづけたようで、上述の通り、47年の8月に、上原教授に卒業論文を提出した。

このときまでに小林の胸はずでに相当悪化していた。そして、闘病むなしく、1948年8月11日に彼は病没した。先の「年譜」には「一九四八年 研究の継続をくわだてる一方、詩集刊行の準備につとめたが、病あらたまり、八月十一日死。（死後、友人の手により、「一橋文芸」復刊第一号、第二号、第三号、第六号に、それぞれ詩数篇ずつが発表された。）」（東京・村上一郎氏記）とある。

2. 『榊都美夫手稿』の内容

学園史資料室に収められた『手稿』は、古書店が添えた内容一覧に沿って記せば以下の通りである。

- (1) 詩稿綴（18×25cmの用紙49枚に詩23編）。この綴りは生前に榊が自らの詩集用に準備していたもので、遺稿詩集『榊都美夫詩集』に収録された。
- (2) 詩稿ノート（B5判ノート）。73頁にわたって清書されている。巻頭に履歴書が貼りつけられている。
- (3) 詩稿ノート（B5判ノート）。（2）の続きで、10頁にわたり作品が書かれている。このノートからは一部が遺稿詩集に収録された。
- (4) 長編小説原稿「六月十八日チエルシイにて」400字用紙202枚完結。
- (5) 中編小説原稿「森の牝じか」400字用紙86枚完結。
- (6) 短編小説原稿10点。
 - ① 「うれしいむすめとけだもの」400字用紙26枚完結
 - ② 「ろばの皮」400字用紙33枚完結
 - ③ 「サンドリヨン」400字用紙17枚完結
 - ④ 「まき毛のリケ」400字用紙7枚完結
 - ⑤ 「赤ずきん」400字用紙5枚完結
 - ⑥ 「仙女」400字用紙7枚完結
 - ⑦ 「ながぐつをはいたねこ」400字用紙11枚完結
 - ⑧ 「森にねむるうつくしい王女」400字用紙23枚完結
 - ⑨ 「おやゆび小僧」400字用紙23枚完結
 - ⑩ 「金髪のうつくしい王女」400字用紙35枚完結
- (7) 小林繁太（榊都美夫）卒業論文下書きノート（A6判ノート3冊、B5判ノート1冊）。
- (8) 「榊詩集始末」と大書された大判封筒。村上一郎による雑多な資料の束。『詩集』刊行発起人一同の名で残る「榊都美夫詩集刊行のために」と題された呼び掛け文、また到着御礼の封書8通・葉書5通、ほか手紙1通、会計備忘録、等。【表1参照】



【表1】「榊詩集始末」内容一覧

No	品目	内容
1	挨拶文1	詩集刊行の寄付呼びかけ
2	挨拶文2	詩集完成及び会計報告等(発送先名簿あり)
3	挨拶文3	詩集完成挨拶文送付時の注意事項、メモあり
4	挨拶文4(校正)	詩集完成挨拶文の校正
5	書簡	上原淳道 → 小林繁太 奥様のお見舞い及び現況報告
6	書簡	中央公論社 海編集部 久野昌子 → 村上一郎 雑誌掲載についての略歴確認
7	書簡	村岡清 → 村上一郎 詩集受領礼状の遅延のお詫び
8	書簡	一橋大学図書館 → 村上一郎 詩集購入のための手続き依頼
9	書簡	1 林正純 → 村上一郎 詩集発送のお礼、世情の感想
10	書簡	2 林正純 → 村上一郎 詩集受領礼のお礼、刊行の労い
11	書状	日臺こう一 → 村上一郎 詩集受領のお礼
12	書状	請求書再作成依頼 一橋大学図書館 → 小林繁太遺稿刊行会
13	はがき	増淵龍夫 → 村上一郎 詩集受領のお礼
14	はがき	弓削達 → 村上一郎 詩集受領のお礼
15	はがき	松本正一郎 → 村上一郎 詩集受領のお礼
16	はがき	杉山忠平 → 村上一郎 詩集受領のお礼
17	はがき	水田洋 → 村上一郎 詩集受領のお礼
18	出納帳・請求書・領収書	詩集刊行費
19	写真及びメモ	榊都美夫(中学四年)
20	その他メモ	

以上のうち、(7) (8)は、古書店によれば「付録」であり、文書目録には入っていない。しかしそこにも、『手稿』に結晶した榊(小林)の精神的営為を支えた、等身大の小林の生(暮らし)が浮き彫りになってくる誠に興味深い資料が含まれていた。

(7)は、卒業論文のまさに最終稿一步手前の原稿であった。病魔と闘いながら研鑽を積んだ小林の日々の苦闘がかいま見られ、手に取ると感動を覚えずにはいられない。上述のように、小林は卒業論文を英文で提出した。内容的にも相当レベルの、まさに論文と呼ぶに相応しい体裁を備えたものであり、苦労の跡が偲ばれる。

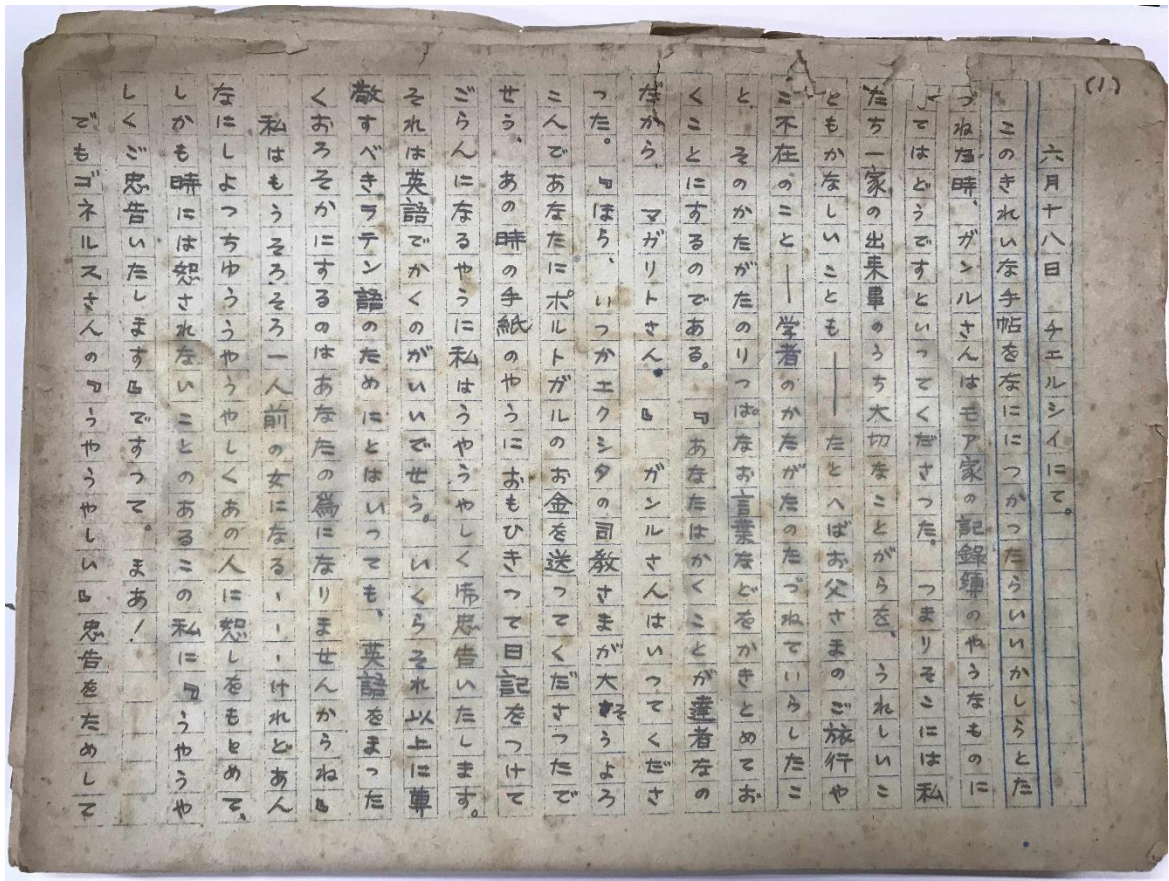
他方(8)は、彼の没後11年を経て友人たちによって発刊された『詩集』の刊行に関わる、おそらく一切の書類であった。ここには書簡類も含まれていた。書簡の多くは、『詩集』刊行後にそれを手にした人びとから呼び掛け人の一人である村上一郎宛てに発信されたものであった。ただ、一通これとは別種の封書が含まれていた。卒業論文作成途上にあった大阪在住の小林繁太宛てに、上原淳道氏が発信した書状だった。それは、昭和22



年（1947 年）6 月 16 日付けで、おそらくその直前に小林から東京吉祥寺に住む恩師・上原専祿宛てに、論文提出の遅延を詫げる手紙を出していたのだろう。論文の遅延を気にすることなく、病状を気遣う内容であった。その前年、上原は東京商科大学の学長に選出されて、また国立大学協会長をも兼務して忙殺されていた時期であったから、息子の淳道氏が代理でこの手紙を書き送っていた。

以上の内容をもつ『手稿』の一切は、ある人物のもとに保存されていた。その人物とは、小林繁太没後 11 年を経た 1959 年 12 月に『榊都美夫詩集』を刊行した際の中心的世話人・村上一郎である。

【図 1】榊都美夫短編小説原稿「六月十八日チエルシイにて」冒頭部



3. 小林繁太（榊都美夫）と村上一郎

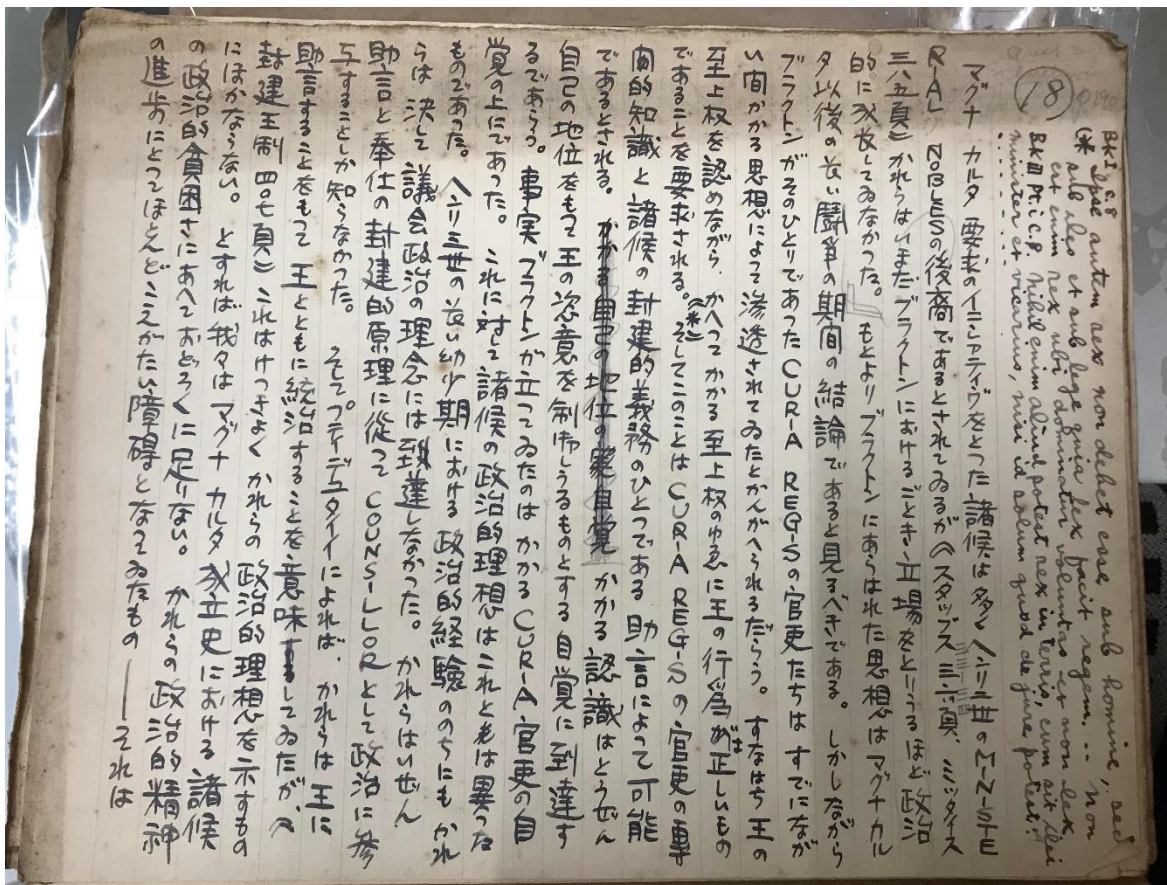
『詩集』刊行に尽力し、また「年譜」を作成してそこに添えた小林繁太の友人・村上一郎については、改めて説明するまでもないだろう。1920 年 9 月 24 日に栃木県に生まれた村上は、旧制宇都宮中学を経て東京商科大学予科に入学、本科に進んでからは高島善哉ゼミナールで西洋近代思想史を専攻した。予科在学中から評論、短歌を精力的に書き、小説も多く書いたが、特にその評論は高く評価された。『北一輝論』（1970 年）が三島由紀夫



に高く評価されるなど、論壇では三島をはじめとして吉本隆明、谷川雁らと交流して、戦後の論壇で異彩を放った文芸評論家だったが、1975年3月29日に自刃して果てている。

村上は、商大予科で一年先に入学していた小林を敬愛し、生涯の友としていた。2人は村上が小平の予科に入学した昭和13年から行動を多く共にし、考え、交流したようだ。村上の小説『武蔵野断唱』（1970年）、また『村上一郎著作集』全12巻（1977-82年）に収められた初期文集（第10巻）に収録されてもいる、昭和20年代から30年代にかけて執筆された評論、また著作集としては未刊に終わった自伝『振りさけ見れば』（1975年）などを繙読すると、『手稿』の書き手・小林繁太に関する記述がことのほか多いことに気づく。

【図2】小林繁太卒業論文下書き部分



榊（小林）と村上、両者の書いたものを手にする読者は、その論調、内容のちがいに最初は戸惑うのではないだろうか。ためしに読者諸氏も『榊都美夫詩集』中の詩を数編読んでみてはどうだろう。

<http://www.ring.gr.jp/archives/misc/chiiki/sakaki.html>



ここでは、『詩集』の冒頭に配された「夜の回想」を引用しておく。村上が、小林の詩人としての才を示す一篇とするものである。

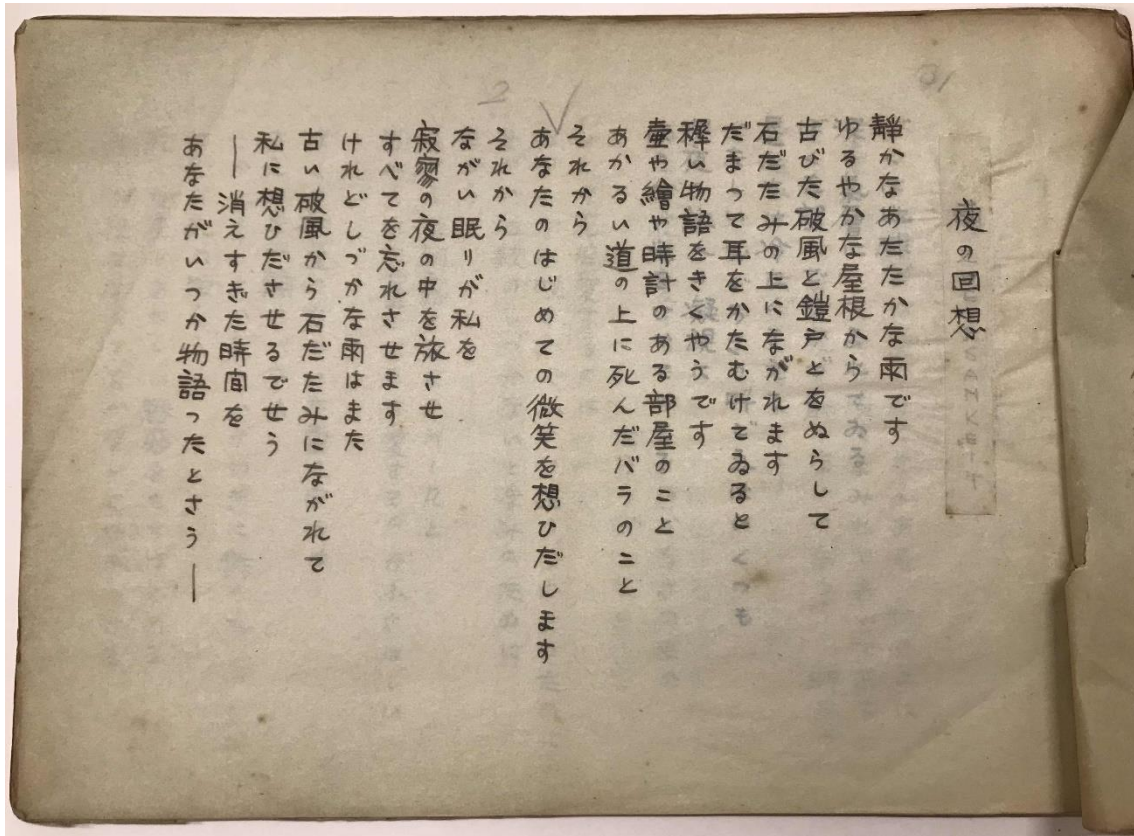
静かなあたたかな雨です
ゆるやかな屋根から
古びた破風と鎧戸とをぬらして
石だたみの上にながれます
だまって耳をかたむけてみると
穉い物語をきくやうです
壺や絵や時計のある部屋のこと
あかるい道の上に死んだバラのこと
それから
あなたのはじめての微笑を想ひだします
それから
ながい眠りが私を
寂寥の夜のなかを旅させ
すべてを忘れさせます
けれどしづかな雨はまた
古い破風から石だたみにながれて
私に想ひださせるでせう
——消えすぎた時間を
あなたがいつか物語つたとさう——

榊都美夫こと小林繁太の『詩集』に溢れる叙情的な感性は、『手稿』にも表れている。その内容と論調に関する紹介ないし分析は、今後の課題としなければならないが、私などには、作品に現れた小林の叙情的感性と、村上の舌鋒鋭く時代を切り裂いた評論の調子との距離に、まず驚いたものだった。そして、両者が生涯の友として（少なくとも村上のなかでは）交遊したこと、また、村上が小林の『手稿』をその死に至るまで大切に保存していたことの不思議に心を奪われた。

小林繁太と村上一郎。この2人を結びつけた絆とその契機とはいったい何だったのだろうか。



【図3】榊都美夫詩「夜の回想」原稿



4. 昭和10年代の商大予科新聞部

東京都下の小平にあった商大予科は、全国から青雲の志をもつ少年たちが集う揺籃だった。その嚆矢は、1897年（明治30年）10月に高等商業学校に設置された1年課程の予科であり、1920年（大正9年）4月に東京商科大学への昇格に際し3年課程となり、関東大震災後は石神井に移転、昭和2年からは小平の地に置かれていた。新制大学「一橋大学」の設置にともない1950年（昭和25年）に廃止されるまで、東京商科大学予科は多くの逸材をはぐくみ、一橋学園の歴史に輝くまさにかげがえのない学園だった。

予科での学生生活は、まだカタチにならぬ熱い想いを互いに語り、ときにはぶつけ合う場であったようだ。大学昇格後の大正9年以降に限ってみても、この東京商大予科は30年間にわたり、総計でおよそ6,400人の俊才が互いに切磋琢磨し、卒業後も折に触れ魂が舞い戻る磁場であった（募集人数は約200名だったが、実際の入学者はこれより若干から20名ほど多い。なお、募集人員は昭和11年より240名に増員された。競争率は約20倍で推移していた）。

大陸での戦局が深まりつつある昭和12年の春に、小林繁太は入学した。その前年に小平の学園には、社会思想史の泰斗となる水田洋が入学しており、小林入学の1年後の13



年には村上一郎が入学する。小林も村上也、水田の誘いによって、当時水田が主宰していた一橋新聞予科版の編集部員となり、交遊を深めていった。

太平洋戦争に突入する前夜の 14～15 年になると、予科にも切迫した空気が漂い始めていたようである。15 年の 12 月に、予科新聞部の主宰人・水田は、自ら予科版を閉じてしまう。「無期休刊」をしたという。もっとも、その後も後輩たちの手によって一橋新聞予科版は発刊されており、常に大学当局、特に配属将校の目が光っていた。

そのような時勢にあって、小林は『手稿』に含まれる詩作と小説の執筆をし、詩の何編かはときどき予科版に掲載されていた。作品が伝えるその叙情的にして脱俗的な雰囲気は、当時の時局とは無縁のように感じられてならないものである。彼は、いったいいかなる心持ちでこれらの詩を紡いでいたのか。

当時の様子を知りたくて、2018 年 8 月 6 日、私は『手稿』の一部を携えて名古屋に水田洋氏を訪ねた。暑いさなか、名古屋大学附属図書館の一角で、私は水田氏から直接、当時の商大予科の雰囲気についての貴重なお話を伺うことができた。

名古屋訪問に前後して関連する文章を繙いたところ、『村上一郎著作集』第 10 巻に収められた水田による「解説」が、当時の小林の活動についての的確な評価を与えている、と思われた。そのことを水田氏本人にお尋ねしたところ、当時（「解説」が書かれた 1977 年時点）の評価はいまも変わらないとのお返事だった。いわく

「もうひとつぐあいのわるいことがあった。というのは、われわれは、哲学青年、文学青年が、学問至上主義、芸術至上主義によって、社会からはなれていくことを批判し、「歴史的社会的現実」（村上也このことばを使っている）から目をそらすなど、くりかえし指摘したのだが、この逃避自体がじつは国家主義へのひとつの抵抗であること、しかも、それへのわれわれの批判が、いつのまにか加害者に荷担するかたちになってくること（たとえば小林繁太＝榊都美夫のばあい）に、かならずしも敏感ではなかったのである。」

つまり、時流に抗して、社会科学と社会思想の両面から「現下の状況」を批判的に捉えて実践的な活動を含めて直視すべきなのに、小林＝榊都美夫は超俗的に詩作などに耽って「逃避」している。そのことを自分（水田）も村上也くりかえし指摘（批判）していたのだが、むしろ小林＝榊の活動そのものが時流への抵抗となっていたことに敏感ではなかった、また、彼らの活動を批判すること自体が国家主義的な加害者に荷担することになっていた、と感じる、と述懐していたのだった。

5. 榊都美夫遺稿刊行会の人びと

『詩集』は、詩人の没後 11 年を経た 1954 年 12 月に、150 部限定本として刊行されている。その顛末については、巻末に付された「後記」に以下の記述がある。



「この詩集は榊都美夫（小林繁太）の旧い友人たちの手によって発行される。一九五九年四月、彼らは遺稿刊行会をつくり、八月を期して、まずこの詩集を刊行し、故人の没後十一周年の命日にそなえようとしたが、経済的な理由ではたせなかった。いま、ようやく多くのひとの好意によって、それが可能となった。詩集の前半「榊都美夫詩集」は、故人が自選して発行を準備しながら、実現を見ずに遺された、そのままの形のものである。後半の「拾遺詩篇」は、木村うた子の手もとに遺された二冊のノオトと、雑誌「一橋」とから、桶谷秀昭、村上一郎が選んで編集した。ほぼ制作年次順に配列されている。遺稿刊行会は、なお多くの作品、書簡などの発表を心がけている。ムラマツ印刷所、橋本製本所の与えられた援助を、発行者ならびに読者は、忘れないであろう。」

編集は、桶谷秀昭、村上一郎が担った。そして「榊都美夫遺稿刊行会」の名のもとに、以下の人びとが発起人として名を連ねていた。秋田ぎろく、上原専祿、木村うた子、林正純、永田洋、村上一郎、有馬文雄、桶谷秀昭、塩沢清、日合碼一、村岡清、弓削達。

この刊行会に名を連ねる人びとの詳細については、ここでは割愛せざるをえない。しかし、夫人であった木村うた子を除いては、各分野で活躍した小林の同窓の人びとであること、そして榊＝小林の詩の数々に共感と共鳴を覚えてこれらを後世に残そうと思った人たちであったことは、明白な事実として指摘できるだろう。

発起人一同の名で残る「榊都美夫詩集刊行のために」と題された呼びかけ文によれば、後に小説類も『榊都美夫作品集』として刊行する希望をもっていたようであるが、これについては実現することはなかった。

6. 小林繁太の手紙

2. で紹介した『手稿』の内容のうち、7) 小林繁太（榊都美夫）卒業論文下書きノートと（8）「榊詩集始末」と書かれた大判封筒は、古書店によれば「付録」であり、文書目録には入っていないものだった。

しかし、内容物を子細に見ると、榊（小林）が送った日々の生活にも関わって誠に興味深い材料が含まれていた。病魔と闘いながら、なお詩作と西洋中世研究を続けようとした真摯な生きざまが、それぞれの紙面に染み入っているような感覚にとらわれもした。実際、卒業論文の下書きノートは、歴史研究に携わったことのある者なら誰もが経験する苦業の跡が偲ばれるものだった。小林の卒業論文は英語で書かれていた。もとより史料はラテン語で書かれたものを使用していたから、論文の材料となる史料の閲読、その批判、また論文を構成させるに至る作業、つまり、既存研究の消化、批判的検証、自説の有意性などの論理展開、論旨の構成、等に苦心を重ねたことがよく分かるものだった。



他方、友人・村上一郎は、小林の人生そのものを賭けたこれらの書類一切を、生涯大切に保存していた。村上が書類を預かるまでの経緯については、小説『武蔵野断唱』の後半に記されているのでここで再言しないが、両名の深い友情の賜物というにふさわしい。

なお、学窓を出てから小林が発したであろう書簡類は、この『手稿』の束に含まれていない。今となつては、もとより全貌を掴むことは困難であるが、一部、重要と思える書簡事例の断片が、受信者によって引用されている。なかでも、恩師・上原専祿宛ての書簡は、この師にとつてもかけがえのない便りであったことがうかがわれる。それによると、小林の最後の日々は、何よりも西洋中世史研究者としての姿勢に貫かれていたようだ。

上原は、没後に発刊された「小林繁太とともに」と題する『詩集』跋文のなかで、小林の生きざまを、「求真性」を備えた学徒、という言葉で表現している。上原は、『詩集』の呼び掛け同人になり、またそこに跋文を添えて、夭折した元学生の研鑽を頌えた。「生きていたとしたら、今ごろはひとかどのメディエヴリストになっていたであろう」と書いた恩師の気持ちは、研究の姿勢と方法に関して厳しいこの中世史家の言としては、破格の評価といつてよい。そう惜別する恩師は、続いて以下のように記し、小林からもらったという手紙を紹介するのである。

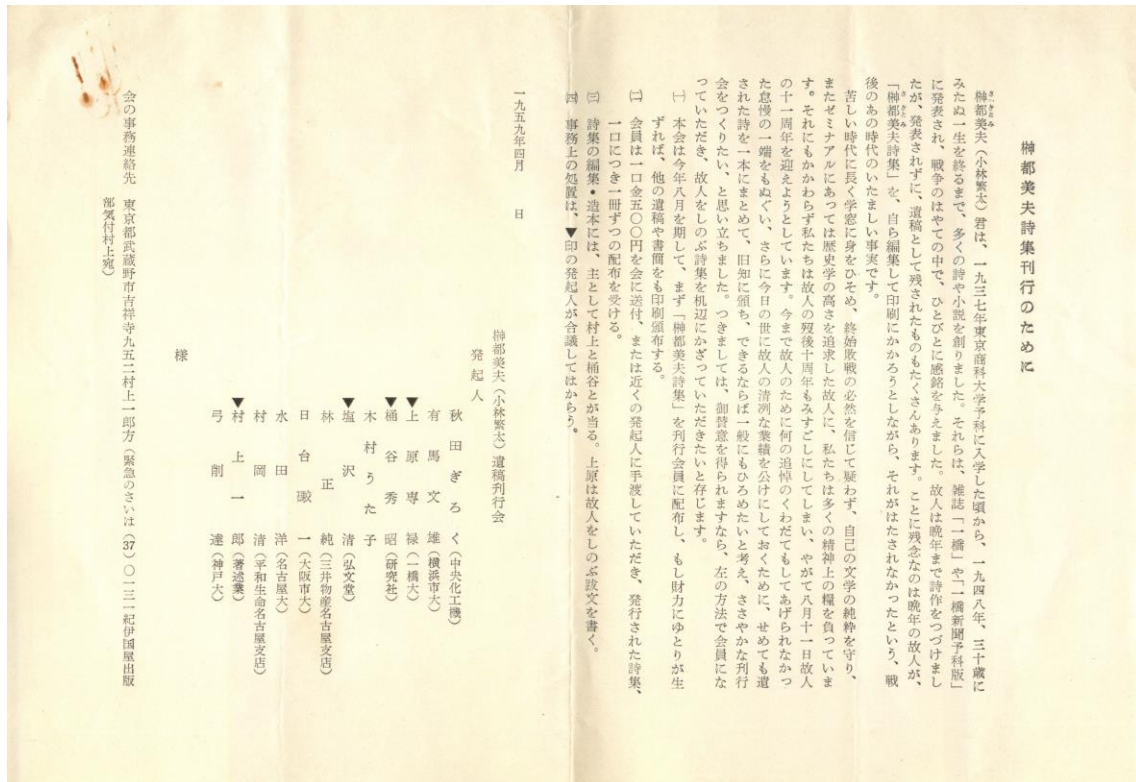
「ひとかどのメディエヴリストになっていたであろうところの小林繁太の「ゆたかな史料とむかひあつてみたいねがひ」が、同じ手紙に書かれている次のような状況の下での「ねがひ」であったことを忘れることができない私は、彼の「ねがひ」をもいっしょにこめて、「歴史的事実」の究明を続けたいわけにはゆかないのである。

以前にはなんでもなかったことが、いまではなんとむつかしく、生のすべてをかけなければならなくなつてゐることせう。もつと大切なもののために、とつておきたいとおもふとぼしい力を、このやうに毎日の生活の中をあへぎながらとほりぬけることのために、つかひつくさねばならない日はいつまでつづくことせう。すべての人たちが中間商人でもあるし、またさうでなければ生きてゆくことができないとかがへられてゐるこの大阪にゐて、玉ねぎのやうに一枚一枚生身をはがしていきながらへるほうがまだしも気持ちのうへでは楽だといふやうな弱さは、けれどやはりあはれむべきものでせうか。」

跋文の最後に引用された書簡には、故郷大阪の地に引き上げて卒業論文の作成に当たつていた当時の暮らし向きについての記述が含まれていた。この時代の小林繁太の暮らし向きについて、村上一郎は詳しくは知らないと述懐している（『武蔵野断唱』）。それだけに、上原によるこの引用は、貴重な証言といわなければならない。



【図4】『榊都美夫詩集』呼びかけ文「榊都美夫詩集刊行のために」



7. おわりに

昨年当室に収められた『榊都美夫手稿』の出現によってわれわれは、昭和10年代から25年の廃止に至るまでの商大予科の歴史を、いわば文芸史というこれまで等閑視されてきた視点から観察することの重要性に気づくことができた。汲めども尽きぬ予科学園の魅力については、今後さらに考察が加えられることになるだろう。他方、事実上一橋新聞部が担っていただいたという「一橋文芸史」は、今後書かれなければならない、とも感じられた。この部分は、若干の材料を蔵するとはいえ、当室においてもなお資料の設置は乏しい。これからの課題としたい。

いずれにせよ、今般入手した『榊都美夫手稿』は、昭和10年代の原資料が未整理のまままで散逸している現状に照らして、改めて当時の商大予科の様子をうかがわせてくれる貴重な証言といってよい。ここに概要を速報して、読者諸賢からの情報提供をお願いする次第である。

